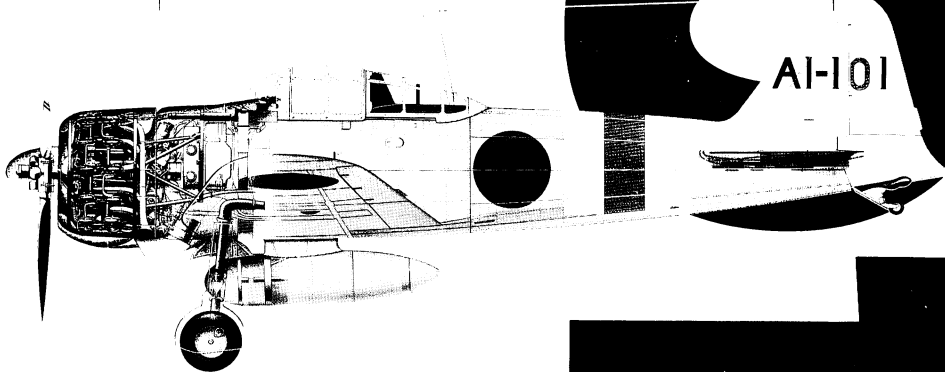
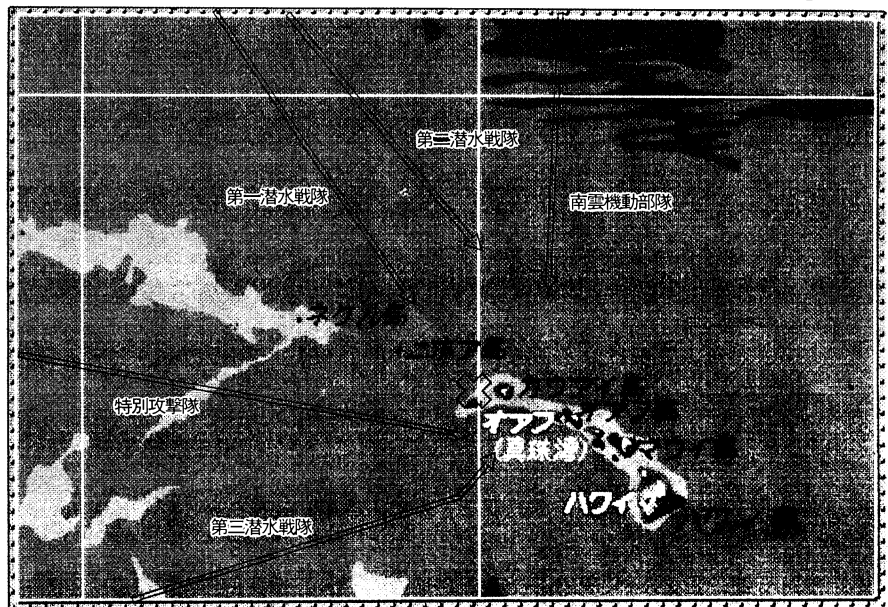
帝國機動部隊の興亡

本資料集は「2601 帝國機動部隊の興亡」のシナリオ中主要な海戦を取り上げて、その経過を紹介したものである。史実の中からシナリオ攻略のヒントを見つけて欲しい。

帝國機動部隊海戦資料

知的世界とあなたをむすぶ NEXUS INTERACT

真珠湾奇襲作戦

ATTACK OF PEARL HARBOR 1941・12・8

1941年12月2日午後8時、「ニイタカヤマノボレ1208」の電文は発せられた。満を持して、日本機動部隊は米太平洋艦隊の本拠地真珠湾に奇襲作戦を開始。戦艦8隻を撃沈し、日本海軍未曾有の大戦果を上げた。

1941年11月2日早朝、南雲忠一中将率いる機動部隊は択捉島の単冠湾を出港した。12月1日には日付変更線を越えて東進している。

12月2日午後8時、機動部隊旗艦である空母「赤城」は暗号電文「ニイタカヤマノボレ1208」を受信した。12月8日午前零時を期して、作戦を開始せよという暗号文であった。12月7日午前7時機動部隊はハワイの哨戒圏内に侵入した。南雲中将は旗艦赤城にDG旗を掲げた。その旗の意味するところは、「皇国ノ興廃此一戦ニアリ。各員一層奮励努力セヨ」であった。

12月7日午前5時30分、機動部隊は攻撃隊に先立って偵察機を出し、真珠湾には戦艦9隻、重巡1隻、軽巡6隻が停泊していることを確認した。

午前5時55分、機動部隊はオアフ島の北方250海里に達し、南雲中将は淵田美津雄中佐率いる第一次攻撃部隊を発進させた。さらに午前7時05分、機動部隊がオアフ島から200海里にまで接近したところで島崎重和少佐が指揮する第二次攻撃隊を発進させた。

午前7時30分、オアフ島に到達した第一次攻撃隊は真珠湾に向かった。午前7時49分、真珠湾を確認した淵田中佐はト連送を発信し、全軍に突撃を命令した。午前7時52分淵田中佐は奇襲の成功を確信し「トラ・トラ・トラ(我奇襲ニ成功セリ)」と発信した。

午前7時57分急降下爆撃隊が飛行場への爆撃を開始し、続いて雷撃隊も戦艦に対する攻撃を開始した。雷撃隊は真珠湾攻撃用に改造された浅沈度魚雷を使用して、不可能といわれた真珠湾の雷撃を行ったのである。水平爆撃隊は午前8時4分に攻撃を開始した。水平爆撃隊は800キロ徹甲弾を搭載し、戦艦メリーランド、テネシー、アリゾナに大きな打撃を与えた。

午後1時50分すべての攻撃部隊は収容され、機動部隊は帰途についた。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

空母６、戦艦２、重巡２、軽巡１、駆逐艦３
機動部隊（南雲忠一中将）
空襲部隊（南雲忠一中将直率）
　第一航空戦隊：空母 赤城、加賀
　第二航空戦隊：空母 飛龍、蒼龍
　第五航空戦隊：空母 瑞鶴、翔鶴
支援部隊（三川軍一中将）
　第三戦隊：戦艦 比叡、霧島
　第八戦隊：重巡 利根、筑摩
警戒隊（大森仙太郎少将）
　第一水雷戦隊：軽巡 阿武隈
　第十七駆逐隊：駆逐艦 谷風、浦風、浜風、磯風
　第十八駆逐隊：駆逐艦 不知火、霞、霰、陽炎
　駆逐艦：秋雲
哨戒隊（今泉喜次郎大佐）
　第二潜水隊：伊19、伊21、伊23
補給部隊（大藤正直大佐）
　給油艦：極東丸、健洋丸、国洋丸、東栄丸、神国丸、東邦丸、日本丸

[米軍]

兵力：戦艦８、重巡２、軽巡６、駆逐艦30
太平洋艦隊 真珠湾停泊艦
（ハズバンド・E・キンメル大将）
　戦艦：テネシー、オクラホマ、カリフォルニア、ウェストバージニア、メリーランド、ペンシルヴァニア、アリゾナ、ネヴァダ
　重巡：ニューオリンズ、サンフランシスコ
　軽巡：セントルイス、ヘレナ、フェニックス、ホノルル、ローリー、デトロイト
　駆逐艦：アレン、シュレイ、チュウ、ハルバート、ファラガット、デューウイ、ハル、マクドノー、ウォーデン、デイル、モナガン、エールウィン、セルフリッジ、フェルプス、カミングス、レイド、ケイス、コニンガム、カッシン、ブルー、ヘルム、ラルフ・タルボット、ヘンリイ、パターソン、マグフォード、ジャービス、ショウ、タッカー、ダウンズ
その他46隻

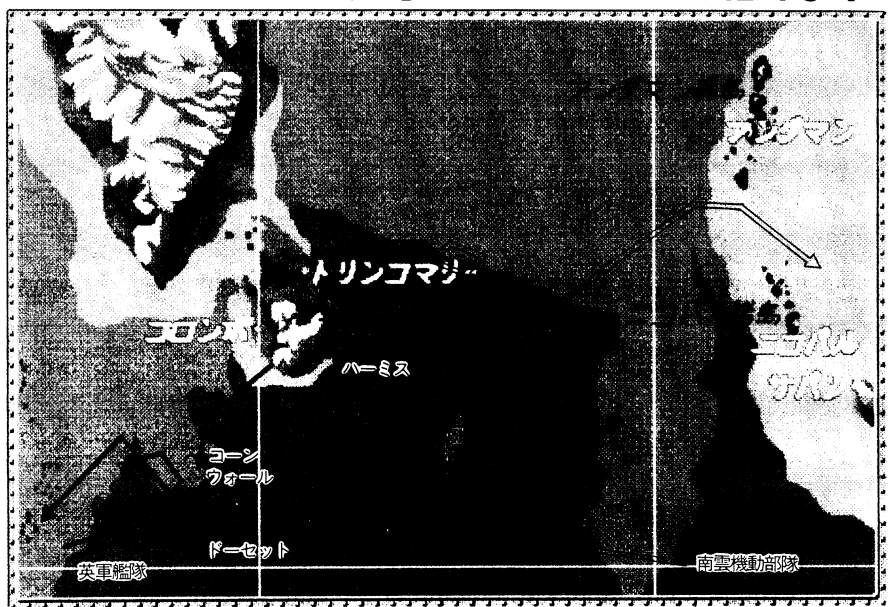
燃える真珠湾!!

輜重（補給）科兵が兵隊ならば、蜻蛉々も鳥の内、電信柱に花が咲く…これは陸軍で歌われた歌であるが、開明的だと言われた日本海軍においても、こと通商破壊戦に関してはほとんど考え方は変わらなかった。輸送船やタンカーを攻撃するのは爆弾や魚雷がもったいないといって嫌がったのである。戦争初期においては自軍の輸送船に護衛もつけないありさまであった。

一方、大西洋でドイツのUボートによる通商破壊戦の威力をいやと言うほど見て来たアメリカは徹底して日本軍の補給線をねらってきた。

ご存じのとおり、真珠湾作戦は奇襲作戦としては史上類を見ないほどの大成功を収めた。しかし、この時撃ち漏らした膨大な量の備蓄燃料、（その量は米国全太平洋艦隊の６ヵ月分にのぼる）港湾修理施設、（珊瑚海海戦で直撃弾を受けた空母ヨークタウンを３日で修理してミッドウェイ海戦に間に合わせるという離れ業を行っている）等が後々の戦局に大きく響いてくるのである。自軍の損害を極度に恐れた南雲中将が、もしこの時山口少将の進言を入れて第二次攻撃隊を発進させていたら…。中部太平洋における米軍の反攻は少なくとも半年以上遅れたはずである。もっとも、その程度でどうにかなる訳ではないほど日米の国力差は開いていた。鉄鋼生産力で18対１、石油にいたっては721分の１にしか過ぎなかった。

インド洋海戦

BATTLE OF INDIAN OCEAN 1942・4・5~9

真珠湾奇襲の成功で意気の揚がる日本軍は、インド洋の英東洋艦隊を撃滅すべく南雲忠一中将が率いる機動部隊を東進させた。一騎当千の優秀な艦爆隊は、驚異的な攻撃精度で英東洋艦隊を沈黙させた。

真珠湾の奇襲作戦を成功裏に終えた南雲機動部隊はすぐさま南方戦線に投入され、42年２月中旬にバンタ海に進み第十一航空艦隊と共同で連合軍の対ジャワ作戦の根拠地ポートダーウィンを攻撃した。３月９日山本五十六連合艦隊指令長官はインド洋作戦を発令した。３月26日セレベス島のスターリング湾を出撃した南雲艦隊はジャワ南方からインド洋に入り、英東洋艦隊の拠点セイロン島に向かった。一方、小沢中将の率いる馬来部隊は北部ベンガル湾に進み、陸軍のビルマとアンダマン島攻略に合わせてビルマに対する英艦隊の連絡を絶とうとしていた。

４月５日早朝、南雲機動部隊はセイロン島から200海里に達し、淵田中佐が指揮する攻撃隊を発進させた。４月５日午前８時コロンボを空襲、駆逐艦テネネドス、仮装巡洋艦ヘクターを撃沈。迎撃に上がった戦闘機を49機撃墜した。

４月５日午後１時ころ99式艦爆53機からなる攻撃隊は、コロンボ南方の洋上で重巡コーンウォール、ドーセットシャーをわずか20分ほどで撃沈した。この際の爆撃命中確率は85%を大きく上回る驚異的なものであった。

４月６日小沢中将の率いる馬来部隊は北部ベンガル湾にて英通商船を16隻撃沈。

コロンボ空襲を終えた南雲機動部隊は一旦北上し４月９日セイロン島北東部にあるトリンコマリー軍港を攻撃した。艦船数隻と飛行場、港湾施設を破壊した。さらに高橋赫一少佐率いる99式艦爆攻撃隊は、セイロン島東岸を南下中の空母ハーミスと駆逐艦バンパイヤとタンカー２隻を撃沈。これまた80%を越える高い爆弾命中率を示した。こうして英東洋艦隊は一掃された。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

兵力:空母6、戦艦4、重巡7、
軽巡3、駆逐艦19
南方部隊機動部隊(南雲忠一中将)
第一航空戦隊:空母 赤城
第二航空戦隊:空母 飛龍、蒼龍
第五航空戦隊:空母 瑞鶴、翔鶴
第三戦隊:戦艦 比叡、霧島、榛名、
金剛
第八戦隊:重巡 利根、筑摩
第一水雷戦隊:軽巡 阿武隈
第十七駆逐隊:駆逐艦 谷風、浦風、
浜風、磯風
第十八駆逐隊:駆逐艦 不知火、霞、
霰、陽炎
馬来部隊機動部隊(小沢治三郎中将)
主隊:重巡 鳥海、軽巡 由良
第四航空戦隊:空母 龍驤、
駆逐艦 汐風
第七戦隊:重巡 熊野、鈴谷、
三隈、最上
第二十五駆逐隊:駆逐艦 夕霧、朝霧、
白雲、天霧
他に軽巡1、駆逐艦4

[英軍]

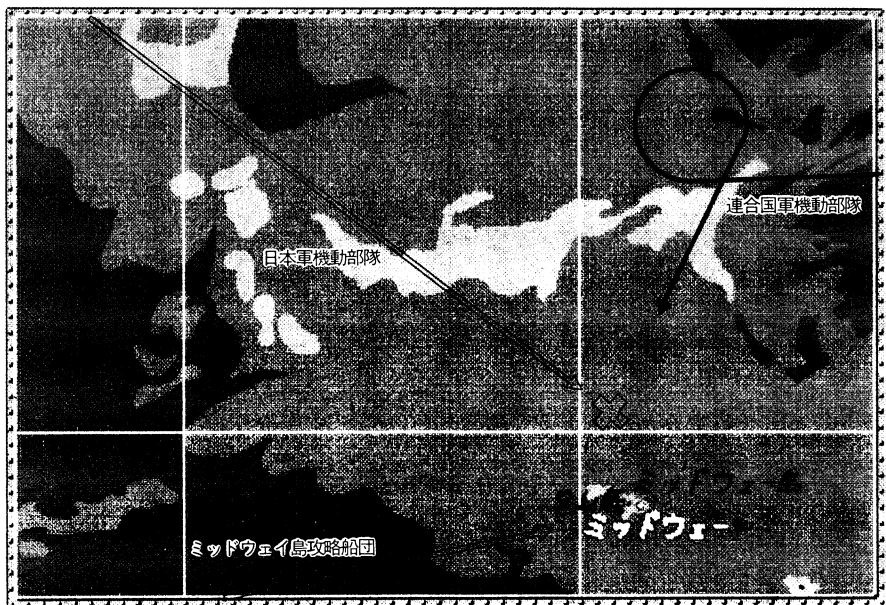
兵力:戦艦5、空母3、重巡5、
軽巡3、駆逐艦16
英国東方艦隊(サー・ジェイムズ・ソ
マーヴィル大将)
戦艦:ウォースパイト、レゾリュ
ージョン、ラミリーズ、ロ
イヤル・ソブリン、リベンジ
空母:インドミダブル、フォミダ
ブル、ハーミス
重巡:コーンウォール、ドーセッ
トシャー、ロンドン、スー
ザン、キャンベラ
軽巡:エンタープライズ、エメラ
ルド、ヒームスカーク
その他16隻

無敵空軍の行方

開戦以来、無敵の進撃を続ける帝国連合艦隊ではあったが、それを支えていたのは鍛えに鍛え抜かれ、超人的技量を持った熟練搭乗員たちであった。海戦初頭からマレー沖航空戦に始まる一連のインド洋作戦終了までの、日本軍航空部隊の攻撃成功率はほとんど神業と言って良いものであった。インド洋作戦時の爆弾命中率は、なんと82%に達している。(これは戦闘行動中の艦船に対する航空攻撃としては現代の対艦ミサイルをも上回る数字である)欧州戦線でドイツを苦しめたスピットファイアが陸軍の一式戦にバタバタ墜とされた。日本機の性能はこの時期、日本軍すら思わなかった事だが世界最強になっていたのである。だがそれも熟練搭乗員あっての話であり、この後の消耗戦により日本軍搭乗員の質が低下するにつれ、日本機もその弱点をさらけ出して行く。ここで零戦を設計した堀越技師が戦後TVインタビューに答えた時の言葉を紹介しよう。「防弾装備が無かったから零戦がやられたと言うのは間違いだ。あれは相手に撃たれないで敵をやっつける戦闘機だ。そのための性能は与えてある」

事実、熟練搭乗員の乗った零戦は、数が同じならば米艦載機相手に終戦まで無敵を誇った。しかし新米搭乗員の乗った機は…。当時の日本軍を象徴する言葉である。

ミッドウェイ海戦

BATTLE OF MIDWAY 1942·6·5

1942年6月5日、日本海軍は米空母機動部隊を壊滅させるべく、持てる兵力を全てそそいでミッドウェイ攻略作戦を敢行した。だが、この戦いが太平洋戦争の行く末を示すことになろうとは…

連合艦隊司令長官山本五十六大将は米空母機動部隊を徹底的に壊滅させるために、ミッドウェイ・アリューシャン作戦（MI作戦）を創案した。

1942年５月27日、南雲中将麾下の機動部隊は瀬戸内海の柱島を出撃した。この大艦隊の中核をなすのは「赤城」、「加賀」、「飛龍」、「蒼龍」の４空母である。他に戦艦から潜水艦まで含めると、戦闘艦艇だけで99隻という空前の大艦隊であった。

６月４日４時30分、南雲艦隊はミッドウェイの北西240海里の地点から、友永丈市大尉が率いるミッドウェイ空襲部隊を発進させた。

空襲部隊は６月５日午前６時15分からミッドウェイ基地に対する攻撃を開始した。しかしミッドウェイ基地には全く米軍機の姿はなかった。約15分前に日本空母群の攻撃に離陸した後だった。友永大尉は“第二次攻撃ノ要アリ”と打電した。

午前７時５分ミッドウェイ島から飛来した米軍機が日本艦隊に攻撃を仕掛けてきたが、これを撃破。南雲中将はミッドウェイ再攻撃を決意し、攻撃隊の兵装転換を命じた。ところが兵装転換がはじまって15分後、「利根」から発進した索敵機より敵機動部隊発見の電信が入った。さらに15分後、この部隊が空母を伴っているとの報告が入り、南雲中将はまず敵空母を攻撃するべく攻撃隊の再兵装転換を命じた。第二航空艦隊の山口多聞少将は「直チニ攻撃隊発進ノ要アリ」と進言してきたが、南雲中将はこれを認めず、全機の換装を終え、戦闘機と攻撃機の一体攻撃に固執した。

午前９時20分、米空母から発進した雷撃機が日本軍機動部隊を攻撃開始した。

午前10時24分、索敵機からの敵発見の報から３時間後にようやく「赤城」から兵装転換の終了した第二次攻撃隊が発艦を始めた。その時、米空母「エンタープライズ」の急降下爆撃機が襲いかかって来たのだった。甲板上の航空機と爆弾が次々と誘爆し３隻の空母は一瞬にして壊滅した。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

兵力:空母6、戦艦11、重巡10、
　軽巡6、駆逐艦50
主力部隊(山本五十六大将)
主隊(山本五十六大将直率)
本隊(山本五十六大将直率)
　第一戦隊:戦艦 大和、陸奥、長門
警戒隊(橋本信太郎少将)
　第三水雷隊:軽巡 川内
　第十一駆逐隊:駆逐艦 吹雪、他
　第十九駆逐隊:駆逐艦 磯波、他
空母隊(梅谷薫大佐)
　航空母艦 鳳翔
特務隊(原田覚大佐)
　潜水母艦 千代田 水上機母艦 日進
警戒部隊(高須四郎中将)
本隊(高須四郎中将直率)
　第二戦隊:戦艦 伊勢、日向、他
警戒隊(岸福治少将)
　第九戦隊:軽巡 北上、大井、他
攻略部隊(近藤信竹中将)
本隊(近藤信竹中将直率)
　第四戦隊第一小隊:重巡 愛宕、鳥海
　第五戦隊:重巡 妙高、羽黒
　第三戦隊第一小隊:戦艦 金剛、比叡
　第四水雷戦隊:軽巡 由良、他9隻
護衛隊(田中頼三少将)
　第二水雷戦隊:軽巡 神通、他25隻
支援隊(栗田健夫少将)
　第七戦隊:重巡 熊野、鈴谷、
　　三隈、最上
　第八駆逐隊:駆逐艦 朝潮、荒潮
航空隊(藤田類太郎少将)
　第十一航空戦隊:水上機母艦 千歳
　　神川丸、他1隻
第一機動部隊(南雲忠一中将)
空襲部隊(南雲忠一中将直率)
　第一航空戦隊:空母 赤城、加賀
　第二航空戦隊:空母 飛龍、蒼龍
支援部隊(阿部弘毅少将)
　第八戦隊:重巡 利根、筑摩
　第三戦隊第二小隊:戦艦 霧島、榛名
警戒隊(木村進少将)
　軽巡 長良、他12隻
先遣部隊(小松輝久中将)
　第三潜水戦隊:潜水艦 伊6、他17隻

[米軍]

兵力:空母3、重巡7、軽巡1、
　駆逐艦15
第十七任務部隊
　(F・J・フレッチャー少将)
第二群(W・W・スミス少将)
　重巡 アストリア、ポートランド
第五群(E・バックマスター大佐)
　空母 ヨークタウン
第四群(G・C・フーバー大佐)
　駆逐艦 ヒューズ、モリス、他4隻
第十六任務部隊
　(R・A・スプルーアレン少将)
第五群(J・D・ミュレー大佐)
　空母 エンタープライズ、他1隻
第二群(T・C・キンケード少将)
　重巡 ニューオーリンズ、他5隻
第四群(A・R・アーリー大佐)
第一水雷戦隊:駆逐艦 フェルプス、
　他3隻
第六水雷戦隊:バルク、他4隻

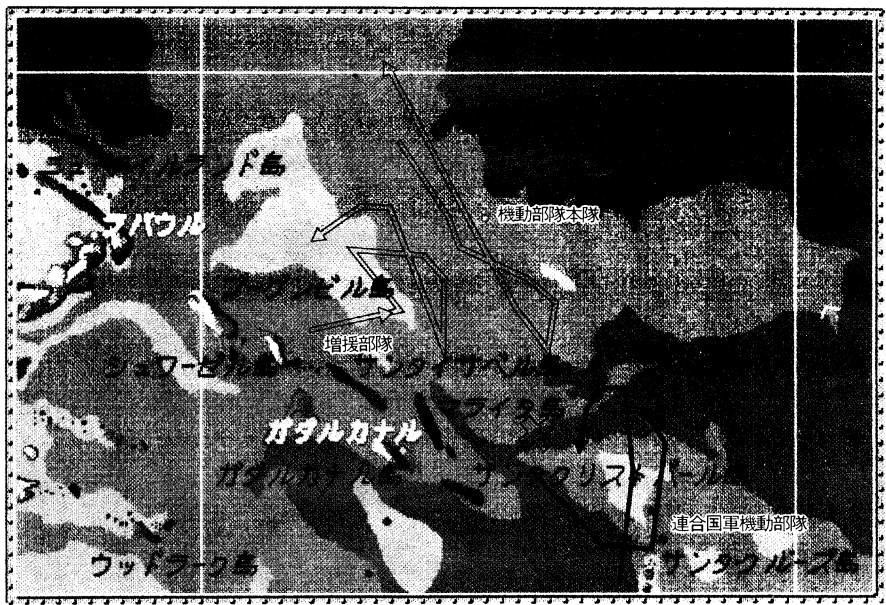
世界最強艦隊つまづく。

　ミッドウェイでは日本空母は6隻参加するはずであった。だが、実際には4隻しか参加していない。米空母は2隻しか参加できないはずであったが、現実には3隻の空母が参加している。この差はどこから来たのか。これは史上初の空母戦、珊瑚海海戦の結果である。ここでは日本側2隻大破、米側1隻撃沈、1隻大破の引き分けだったが、日本が大破した空母の修理に3ヵ月を要したのに対し、米国は僅か3日で修理してきたのである。しかし、それでもこの時日本側は米国太平洋艦隊の6倍近い戦力を投入し、必ず勝てる筈だった。

　…もしミッドウェイで日本軍が勝利を収めていたら?恐らくその後の戦局に大きな影響を与えたであろうが、ガダルカナル島を何とかしない限り、結局は米国の巨大な生産力に押し切られてしまった事には変わりは無いだろう。いずれにせよ、これが太平洋から米国艦隊を駆逐できる最後の機会であった。

　ミッドウェイ以後、終戦までに日本が建造した正規空母は4隻、準正規空母と特設空母を含めても11隻である。一方、米国の正規空母は17隻、軽空母と特設空母を含めた数は145隻に及ぶ。殆ど毎週1隻のペースで竣工してくるのである。無論、駆逐艦や輸送船、潜水艦や航空機に至ってはそれ以上の差がある。日本はこの時失った戦力的優位を二度と取り戻せなかった。

第2次ソロモン海戦

BATTLE OF SOLOMON SEA
1942・8・23〜25

ミッドウェイ海戦で大敗を喫した日本軍は南太平洋の制海権を奪回すべく1942年8月18日ガダルカナル島に逆上陸した。対する米軍は第61任務部隊を差し向け、両軍はガダルカナル北方海域で激突した。

第一次ソロモン海戦で勝利した日本軍はガダルカナル島を奪還すべく陸軍の一木支隊の916名を1942年８月19日、上陸させた。しかし、上陸部隊は想像以上に強化された米軍海兵隊の手によって全滅した。

日本軍は引き続きガダルカナル島への逆上陸部隊を投入しつつ、海上輸送の危険を排除すべく南雲中将率いる空母機動部隊を出動させた。

８月24日、原忠一少将率いる陽動艦隊はガダルカナルの飛行場を攻撃するために、正午前に「龍驤」から攻撃隊を発艦させた。この報を受けた米軍艦隊司令官フランク・フレッチャー中将は、空母サラトガから急降下爆撃機30機、雷撃機8機を龍驤攻撃に向かわせた。８月24日午後2時、攻撃隊は龍驤を発見、攻撃を開始した。ガダルカナル攻撃のために15機の零戦を発進させていた龍驤は直衛機は僅か９機しかなく、なすすべもなく撃沈された。

一方、南雲機動部隊も米空母を捕捉していた。午後12時28分、索敵機が南方300海里に空母２隻を含む、敵機動部隊を発見し、南雲中将は午後１時、翔鶴から第一次攻撃隊を、午後２時に瑞鶴から第二次攻撃隊を出動させた。第一次攻撃隊は午後２時38分敵空母を発見、攻撃を開始した。だが、攻撃隊は既にレーダーで発見され、戦闘機30機に迎撃された。攻撃隊は大損害を受けつつもこれを突破し、空母エンタープライズに爆弾３発を命中させ中破させた。

第一次攻撃隊はこの他に戦艦ノースカロライナにも攻撃を加えたが、激しい対空砲火の前に決定的な戦果を上げる事は出来ず、零戦３機、99式艦爆17機を失う結果となってしまった。また、瑞鶴から発進した第二次攻撃隊は敵艦隊を発見できずに帰還する事となった。

この海戦後、日本軍は第十七軍を派遣し同島の奪回を試みたが、米軍の堅固な防御の前に消耗戦に引き込まれ、敗退を繰り返す事となった。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

兵力:空母3、戦艦3、重巡3、
駆逐艦31
機動部隊(南雲忠一中将)
第三艦隊(南雲忠一中将直率)
本隊(南雲忠一中将直率)
第一航空戦隊:空母 翔鶴、瑞鶴、龍驤
第十駆逐隊:駆逐艦 秋雲、夕雲、巻雲、風雲
第16駆逐隊:駆逐艦 時津風、他4隻
前衛
第十一戦隊:戦艦 比叡、霧島
第七戦隊:重巡 熊野、鈴谷
第八戦隊:重巡 利根、筑摩
第十戦隊:軽巡 長良、他3隻
前進部隊(近藤信竹中将)
第二艦隊(近藤信竹中将直率)
本隊(近藤信竹中将直率)
第四戦隊:重巡 愛宕、高雄、摩耶
第五戦隊:重巡 妙高、羽黒
第二戦隊:戦艦 陸奥
第四水雷戦隊:軽巡 由良、他8隻
航空部隊
第十一航空戦隊:水上機母艦 千歳、山陽丸、他2隻
増援部隊(田中頼三少将)
護衛隊(田中頼三少将直率)
第二水雷戦隊:軽巡 神通、他8隻
砲撃支援隊
第三十駆逐隊:駆逐艦 睦月、弥生、望月、卯月
別動隊:駆逐艦 陽炎、夕凪、磯風

[米軍]

兵力:空母3、戦艦1、重巡5、
軽巡1、駆逐艦16
第六十一任務部隊
(F・J・フレッチャー中将)
旧第十一任務部隊:
空母 サラトガ 重巡 ニューオーリンズ、ミネアポリス
第一水雷戦隊:駆逐艦 フェルプス、ファラガット、デール、マクドノウ、ウォーデン
旧第十六任務部隊
(R・A・スプルーアンス少将)
空母:エンタープライズ
戦艦:ノースカロライナ
重巡:ポートランド
軽巡:アトランタ
第六水雷戦隊:駆逐艦 モーリーベンナム、ボルチ、グウイン、グレイソン
旧第十八任務部隊
(F・P・シャーマン大佐)
空母:ワスプ
重巡:サンフランシスコ、ソルトレイクシティ
第十二水雷戦隊:駆逐艦 スタック、アーロンワード、ステレット、ラフェイ、ファーレンホルト、ラング

ソロモンの悪夢。

その島の小さな飛行場を巡って日米両軍が血みどろの争奪戦を繰り広げる事になった時、日本軍参謀本部には島の名前どころか、その島が何処に在るのかすら知っているものは一人もいなかった。その島の名前はガダルカナル。この南太平洋に浮かぶ小さな島を巡って、日米は7ヵ月に及ぶ泥沼の消耗戦を繰り広げる事となる。この半年間で日本の失った艦船は戦艦2、巡洋艦6大破7、空母1大破2、駆逐艦14大破8。米側は戦艦大破1、巡洋艦11大破10、空母1大破2、駆逐艦19大破3。これだけを見ると辛うじて日本側の勝ちとも取れるが、ミッドウェイが取れなかった以上、日本にとってガダルカナルの維持はさしたる戦略的意義は無かった筈であった。そして何より痛かったのは大型輸送船を含む海上輸送部隊を30隻も失った事である。これは当時の日本が保有する輸送船の約1割にあたる。対する米側の輸送船被害は微々たるものであった。こうして戦略的には大した意味のない大消耗戦を繰り広げた結果、日本の海上輸送力は低下し破滅が始まる。この戦いは無敵皇軍が敗れた初めての戦いでもある。ガダルカナルにおける日本陸軍の死傷者は参加兵員の75%にも及ぶ。そして、その8割が餓死病死であった。これ以降、陸軍はすべての戦線で補給を全く無視した作戦を次々と繰り返し、悲惨な戦場を拡大していくのである。

南太平洋海戦

BATTLE OF SANTA CRUZ 1942・10・26

1942年10月26日、南太平洋海戦での勝利は日本軍機動部隊の収めた最後の勝利となった。日本軍は一時的にせよ米軍空母を太平洋上から駆逐したのである。だが、日本軍機動部隊の受けた損害もまた、大きいものであった。

連合艦隊司令長官山本五十六大将は1942年10月22日に予定されていた陸軍第二師団のガダルカナル島のヘンダーソン飛行場攻撃を支援するために近藤信竹中将麾下の第二艦隊と南雲中将麾下の第三艦隊をソロモン海域に派遣した。

10月26日早朝、南雲中将は艦隊の進路を北々東に取りつつ、24機の索敵機を発艦させ、2段索敵を行わせた。午前4時50分、空母翔鶴の索敵機が南東240海里の洋上に敵空母部隊を発見した。この知らせを受けた南雲中将は待機させていた攻撃隊をただちに発進させた。一分一秒でも早い攻撃は苦杯をなめさせられたミッドウェイ海戦での二の轍を踏まないためのものであった。

真珠湾奇襲以来の雷撃戦の名手、村田重治少佐が率いる第一次攻撃隊は午前6時55分、敵空母ホーネットを発見し、攻撃を開始した。ホーネットに大きな損害を与えた事と引き換えに、第一次攻撃隊は零戦5機、99式艦爆17機、97式艦攻16機を失い村田少佐も不帰の人となった。

第二次攻撃隊は空母エンタープライズを発見してこれに攻撃をかけ大破させ、さらに駆逐艦ポーターを撃沈した。対して第二次攻撃隊の損害は零戦2機、99式艦爆12機、97式艦攻10機を失った。

午前7時45分、隼鷹から発進した第三次攻撃隊は戦艦サウスダコタと軽巡サンジュアンに攻撃を加えこれを中破させた。

午後1時33分第六次攻撃隊が隼鷹から発進し、漂流中のホーネットに爆弾一発を命中させた。米艦隊は空母ホーネットを放棄して退却、日本軍の勝利として南太平洋海戦は終了した。日本軍は空母ホーネットを撃沈、空母エンタープライズ、戦艦サウスダコタ、軽巡サンジュアンを中破させたのである。この結果、米軍は行動可能な空母を太平洋上から失ってしまったのだった。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

兵力:空母4、戦艦4、重巡8、
軽巡2、駆逐艦22
機動部隊(南雲忠一中将)
第三艦隊(南雲忠一中将直率)
本隊(南雲忠一中将直率)
第一航空戦隊:空母 翔鶴、瑞鶴、
瑞鳳
第四駆逐隊:駆逐艦 嵐、舞風
第十六駆逐隊:駆逐艦 雪風、時津風
天津風、初風
付属:重巡 熊野
駆逐艦 浜風、照月
前衛
第十一戦隊:戦艦 比叡、霧島
第七戦隊:重巡 鈴谷
第八戦隊:重巡 利根、筑摩
第十戦隊:軽巡 長良、
第十駆逐隊:駆逐艦 秋雲、風雲、
巻雲、夕雲
第十七駆逐隊:駆逐艦 浦風、磯風、
谷風
前進部隊(近藤信竹中将)
第二艦隊:(近藤信竹中将直率)
本隊(近藤信竹中将直率)
第三戦隊:戦艦 金剛、榛名
第四戦隊:重巡 愛宕、高雄
第五戦隊:重巡 妙高、摩耶
第二水雷戦隊:軽巡、五十鈴
第十五駆逐隊:駆逐艦 黒潮、
親潮、早潮
第二十四駆逐隊:駆逐艦 海風、
涼風、江風
第31駆逐隊:駆逐艦 長波、巻波
高波

[連合軍]

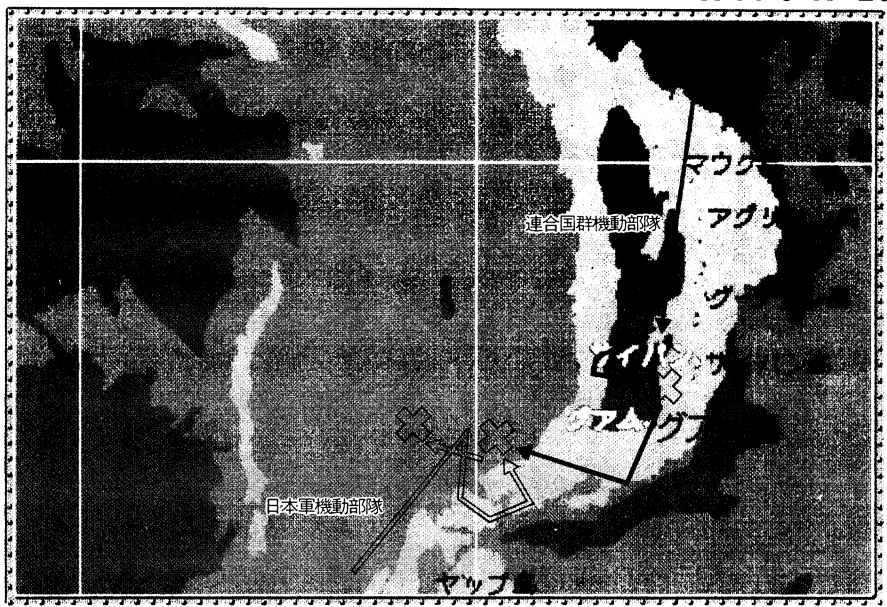
兵力:空母2、戦艦1、重巡3、
軽巡3、駆逐艦13
機動部隊(T・C・キンケード中将)
第十六任務部隊
空母:エンタープライズ
戦艦:サウスダコタ
重巡:ポートランド
軽巡:サンジュアン
駆逐艦:マハン、カッシング、ポーター、スミス、プレストン、モーレー、ショー、カニンガム
第十七任務部隊
空母:ホーネット
重巡:ノーザンプトン、ペンサコラ
軽巡:サンディエゴ、ジュノー
駆逐艦:モーリス、アンダーソン、ヒューズ、オースチン、ラッセル、バートン

鉄の沈む海、鉄湾海峡。

南太平洋海戦は帝国機動部隊が勝利を収めた最後の海戦である。このとき米側がもつ空母は僅かに2隻。そのホーネットを撃沈し、エンタープライズを撃破して、一時的にとはいえ米国空母を0にしたのである。エンタープライズは修理が可能なものの、修理中のサラトガが帰って来るには時間がかかるし、量産型の空母エセックス級が竣工するまでには、まだ2ヵ月はかかる。米国は英国に頭を下げまくって空母ビクトリアを借りるはめになったのである。米側はこの日を「史上最悪の海軍記念日」と称した。そして2ヵ月後、中部太平洋で米軍の反攻が始まる。新鋭空母エセックスを筆頭に、6隻の空母で蘇った米国機動部隊は月に4隻ずつ空母が増え続けるバケ物であった。

この動き出した怪物を相手に、帝国海軍は航空消耗戦に引きずり込まれてしまう。日本が戦争全期間中にわたって生産したより多い数の航空機を毎年生産する国が相手である、結果は明白であった。ラバウル航空隊の活躍は目覚ましかったが、ソロモン航空撃滅戦はその勇ましい名称と裏腹に、数多くの熟練搭乗員と山本五十六長官の命を飲み込んで、トラック島泊地空襲で終わりを告げるのである。ガダルカナルを巡るソロモンの海では、数多くの海戦が有り、あまりにも多くの船が沈んだため、今でもアイアンボトム、鉄湾海峡と呼ばれている。

マリアナ沖海戦

BATTLE OF PHILIPPINE
1944・6・19~20

1944年6月19日、マリアナ諸島の沖合で激突した両軍の戦いは太平洋戦争史上最大の空母決戦となった。しかし、戦局はすでに後戻りできないところまで来ていた。日本の敗戦は決定的になったのである。

1944年６月19日午前７時25分、サイパン島沖合に位置する小沢治三郎中将率いる第一機動部隊は、380海里北方に展開する米第五艦隊を攻撃するため第一次攻撃隊として零戦14機、同戦闘爆撃機43機、天山７機を発進させた。しかし、敵空母に損害を与える事はできず、戦艦１隻、重巡１隻を小破させるに留まった。第一次攻撃隊で帰還できたのは27機だけだった。

午前７時45分、第一航空戦隊から主力の第二次攻撃隊、零戦48機、彗星53機、天山29機が発進した。しかし、戦果は戦艦１隻と空母１隻を小破しただけに終わり、引き換えに失った戦力は零戦33機、彗星43機、天山29機と、そのほとんどを失う事となってしまった。

第三次攻撃隊及び第四、第五次攻撃隊は敵艦隊を発見できず、帰投中に敵戦闘機の迎撃を受けて大損害を被る事となった。

午前10時30分、第二航空戦隊から第六次攻撃隊として零戦８機、彗星９機が発進し敵艦隊に攻撃を加えたが敵に損害を与えることはできず、零戦４機、彗星６機が未帰還となった。

小沢部隊はこの一日の戦闘だけで零戦60機、同戦闘爆撃機44機、彗星49機、99艦爆９機、天山31機を失い、これは全艦載機の56%にあたる大損害であった。

19日午前８時10分、米艦隊の潜水艦アルバコアが第一機動部隊の旗艦、空母大鳳に魚雷を発射し、１本が命中して沈没。続いて午前11時20分、今度は空母翔鶴が潜水艦キャバラの攻撃を受けて沈没、２隻の空母を失った小沢機動部隊は、帰投した攻撃隊を収容して、態勢を立て直すべく北上した。

20日午後になって日本機動部隊を発見した米第五艦隊は、同日午後５時35分に攻撃を開始した。この攻撃で空母飛鷹が沈没し、油槽船２隻を大破、空母瑞鶴、隼鷹、龍鳳、千代田、戦艦榛名、重巡摩耶が損傷した。日本軍の完敗であった。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

兵力:空母9、戦艦5、重巡11、
軽巡3、駆逐艦28
第一機動部隊(小沢治三郎中将)
本隊
甲部隊
第一航空戦隊:空母 大鳳、翔鳳、瑞鶴
第五戦隊:重巡 妙高、羽黒
第十戦隊:軽巡 矢矧、他9隻
乙部隊
第二航空戦隊:空母 隼鷹、飛鷹、龍鳳、
戦艦 長門
重巡 最上
第四駆逐隊:駆逐艦 野分、山雲、満潮
第二十七駆逐隊:駆逐艦 時雨 他3隻
前衛
第一戦隊:戦艦 大和、武蔵
第三戦隊:戦艦 金剛、榛名
第四戦隊:重巡 愛宕、高雄、摩耶、鳥海
第七戦隊:重巡 熊野、鈴谷、利根、筑摩
第二水雷戦隊:軽巡 能代、他8隻
第三航空戦隊:空母 千歳、千代田、瑞鳳
補給部隊
油槽船5隻、駆逐艦 響、卯月
別動浪速船団
油槽船 浪速、軽巡 名取
駆逐艦 初霜、栂、夕凪

[連合軍]

兵力:空母15、戦艦7、重巡8、
軽巡12、駆逐艦65
第五艦隊(R・A・スプルーアス大将)
第五十八任務部隊
(M・A・ミッチャー中将)
第一群:空母 ホーネット、ヨークタウン、ベローウッド、バターン、他14隻
第二群:空母 ワスプII、バンカーヒルキャボット、モンテレー、他15隻
第三群:空母 レキシントン、エンタープライズ、プリンストン、サンジャシント、他18隻
第四群:空母 エセックス、カウペンス、ラングレー、他18隻
第七群:戦艦 ワシントン、ノースカロライナ、アイオワ、ニュージャージー、サウスダコタ、アラバマ、インディアナ

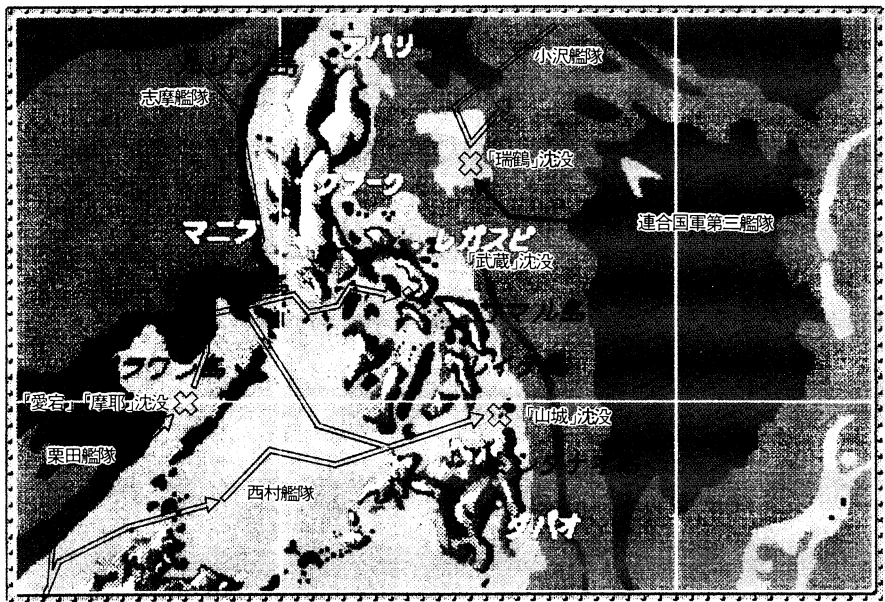
VT信管の登場と海軍航空隊の最期。

マリアナ沖で、史上最大規模の空母決戦が行われた時、日本軍は米軍より先に敵艦を発見した。小沢中将はアウトレンジ戦法を行えば必ず勝てると信じて、3倍以上の敵に立ち向かって行った。日本は米側が自軍より優れたレーダーを持っている事も知っていた。それでもなお、勝てると確信していたのである。確かに海戦当時の日本軍ならば勝てたかも知れない。だが、この時すでに、度重なる消耗戦によって、海軍航空隊の技量は小沢中将らの想像を遙かに下回っていたのである。しかも、米軍は日本軍には考えもつかない新兵器を用意していた。VT(近接作動)信管である。

日本にVT信管の知識が無かった訳では無い。レーダーを発明したのは日本人なのだから…。知識があっても作れなかったのである。VT信管の不発弾を手に入れ、複製する事は実験室レベルなら可能である。だが、対G限度2万Gを越える真空管を、艦隊が装備するに足る数だけ量産する事は、当時の日本の電子技術では不可能であった。

燃料不足でろくに訓練すら行われていない若い搭乗員達は二度と還らなかった。出撃機の87%を失った海軍航空隊は、続く台南沖航空戦で事実上壊滅する。空母は有るが搭載機が無い。米軍はこの戦いをマリアナの七面鳥撃ちと呼び、これ以後サイパンを発進したB29が帝都の空を覆う事になる。

レイテ沖海戦

BATTLE OF LEYTE 1944・10・11~23

1944年10月17日、米軍はマッカーサー元帥のもと、レイテ湾のスルアン島に上陸した。大本営は直ちに「捷一号作戦」を発令した。「捷一号作戦」とは、1944年に立案された一連の決戦作戦の第一号であった。

捷一号作戦とは囮部隊によって敵空母部隊を引き付け、その間に主力部隊がレイテ湾に強襲をかけ、敵の上陸部隊を撃滅する作戦であった。この囮部隊の任を受けたのは小沢中将率いる第一機動部隊。そしてレイテ湾に突入する主力部隊は栗田中将麾下の第一遊撃部隊、西村中将の第三部隊及び志摩中将の第二遊撃部隊がその支援にあたった。

10月23日午前5時30分、栗田艦隊は米潜水艦への警戒態勢に入った。同日午前6時34分、パラワン島沖で米潜水艦ダーターの攻撃を受ける。6本の魚雷は「愛宕」と「高雄」を直撃し、愛宕は沈没、高雄は航行不能になった。続いて4本の魚雷が「摩耶」に命中、3分後に沈没した。10月24日未明、栗田艦隊はシブヤン海に入った。その動きは米第三艦隊に察知され、午前10時40分、栗田艦隊に空襲を開始した。五次にわたる攻撃で、戦艦大和、武蔵、長門、重巡妙高、駆逐艦清霜、浜風が損害を受けた。第5次攻撃を受けていた午後3時30分には栗田艦隊は反転を開始していた。艦隊がレイテに背を向けた事を確認した米第三艦隊は攻撃を中止し、北方エンガノ沖の小沢艦隊に攻撃目標を変更した。午後6時30分、栗田艦隊は再び反転し予定通りレイテ湾を目指した。一方の西村艦隊は10月25日午前4時にレイテ湾に突入予定でスリガオ海峡進行中であった。午前3時11分、待ち受けていた米戦艦部隊の砲門は一斉に火を吹いた。圧倒的な集中砲火の前に、西村艦隊は駆逐艦時雨を残して全滅した。レイテ湾突入を目指し南下を続ける栗田艦隊は、25日午前6時44分にサマール島沖で、米第一護衛空母隊と交戦を開始した。この戦闘で栗田艦隊は駆逐艦2隻、空母1隻を撃沈した。しかし、栗田艦隊は分散疲弊し午前10時45分、再び陣形を立て直した時には戦艦4隻、重巡2隻、駆逐艦8隻だけになっていた。栗田艦隊はレイテ湾突入を断念し、午後0時26分北方へ艦隊を反転させた。こうして連合艦隊最期の決戦も失敗に終わったのである。

海戦に参加した両軍艦隊

[日本軍]

第一遊撃部隊(栗田健男中将)
第一次部隊(栗田健男中将直率)
第一戦隊:戦艦 大和、武蔵、長門
第四戦隊:重巡 愛宕、高雄、
摩耶、鳥海
第五戦隊:重巡 妙高、羽黒
第二水雷戦隊:軽巡 能代
他9隻
第二部隊(鈴木義尾中将)
第三戦隊:戦艦 金剛、榛名
第七戦隊:軽巡 熊野、鈴谷、
利根、筑摩
第十戦隊:軽巡 矢矧
他6隻
第三部隊(西村祥治中将)
第二戦隊:戦艦 山城、扶桑
重巡 最上
第四駆逐隊:駆逐艦 満潮、朝雲、
山雲
第二十七駆逐隊:駆逐艦 時雨
機動部隊(小沢治三郎中将)
第三航空戦隊:空母 瑞鶴、千歳、
千代田、瑞鳳
第四航空戦隊:戦艦 伊勢、日向
巡洋艦戦隊:軽巡 多摩、五十鈴
第一駆逐艦隊:軽巡 大淀
駆逐艦 桑、槇、杉、桐
第二駆逐連隊:第六十一駆逐隊
駆逐艦 卯月、初月、
秋月、若月
第四十一駆逐連隊:駆逐艦 霜月
第二遊撃隊(志摩清英中将)
第二十一戦隊:重巡 那智、足柄
第一水雷戦隊:軽巡 阿武隈
他7隻

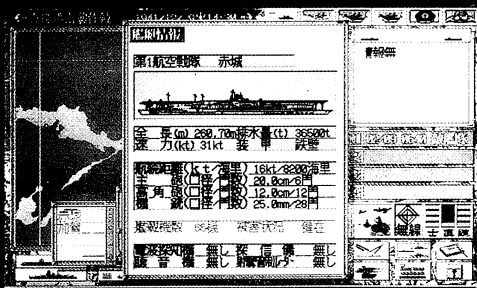
[連合軍]

第三艦隊(W・F・ハルゼー大将)
第三十八任務部隊
(M・A・ミッチャー中将)
第一群(J・S・マッケーン中将)
空母:ワスプ 、他23隻
第二群(G・F・ボーガン少将)
空母:イントレピッド、他25隻
第三群(F・C・シャーマン少将)
空母:レキシントン、他24隻
第四群(L・E・デビンソン少将)
空母:フランクリン、他18隻
第七十七任務部隊
戦艦部隊(オルンデンドルフ少将)
戦艦:ペンシルバニア、他75隻
第七十七任務部隊
第四群第三集団
タフィ3(C・F・スプレイグ少将)
護衛空母:ファンション・ベイ
他12隻

史上最大の海戦、絶対国防圏の崩壊。

日本の絶対国防圏の内、サイパンは既に失われていたが、フィリピンを失う事は日本に入ってくる南方資源の全てを失う事を意味する。レイテ突入作戦、文字通り連合艦隊の全てを賭けて行われた「捷一号作戦」は99%成功していた。初めて特攻隊に襲われた米艦隊はパニックを起こし、囮となった小沢、西村両艦隊は全滅しつつも敵艦隊のおびき出しに成功した。栗田艦隊はレイテ湾に49kmまで迫っていた。大和の主砲射程まであと8km。レイテ湾には、丸裸の米軍上陸部隊百万名がひしめいていた。しかし、何故か栗田中将はレイテ湾を目前にして撤退してしまう。戦後マッカーサーは述べている。「もし、この時栗田艦隊が突入していたら、私はレイテと百万の部下とアメリカの威信の全てを失っていただろう」

武蔵撃沈直後、連合艦隊司令部から栗田艦隊へ打たれた一通の電信がある。「天佑を信じ全軍突入せよ、ここで引き返せば今後水上部隊突入の機会は二度とあらざるべし」…なぜ栗田中将が転進を決意したのかについては戦後にいたっても一切語られる事は無かった。連合艦隊はこの日消滅した。

この戦闘で武蔵が受けた攻撃は直撃弾16発、魚雷は20本に及ぶ。史上これだけの攻撃を受けてなお5時間も戦闘を続けられた艦は存在しない。そして絶対国防圏を設定して守り切れた国もまた歴史に存在しない。

知的世界とあなたをむすぶ

NEXUS INTERACT

〒106 東京都港区六本木7-21-7 ウェスタ六本木
TEL. 03-5474-3581(代)
ゲーム内容に関するお問い合わせは
TEL. 03-5474-3584／ユーザーサポート係

参考文献／別冊歴史読本特別増刊「日本海軍総覧」新人物往来社
「太平洋戦争 海戦ガイド」新紀元社
「太平洋海戦 I～II」講談社